

P-87 中高年婦人の高トリグリセライド血症と血液凝固系および線溶系に関する検討

長崎・村上病院
村上俊雄, 村上京子

〔目的〕 中性脂肪はコレステロールに従属して変化する因子に過ぎないとされていたが、フラミンガム研究所も最近になって高トリグリセライド血症（高TG血症）は少なくとも更年期以降の女性の動脈硬化性病変の危険因子であることを明らかにしている。そこで、高TG血症の動脈硬化性病変に対する影響を血液凝固系および線溶系を中心に検討する。〔方法〕 40～74歳の中高年婦人162例の総コレステロール(TC)、中性脂肪(TG)、HDLコレステロール(HDL)を測定した。またリポ蛋白分画により高脂血症の病型分類(WHO)も行った。さらに外因性凝固因子である第Ⅶ、第Ⅹ因子および線溶系阻害因子のplasminogen activator inhibitor-1 (PAI-1)についても検討した。〔成績〕 高脂血症の頻度は59/162例(36.4%)であり、高TC血症46/162例(28.4%)、高TG血症34/162例(21.0%)であった。高脂血症59例の病型分類はⅡa型25例、Ⅱb型21例およびⅣ型13例であった。低HDL血症は16/162例(9.9%)であり、このうち高TG血症をきたしたものは10/16例(62.5%)と高率であった。血中のTGの増加に伴って第Ⅶ因子の増加が連動し、正相関を示した($r=0.276$)。またTGと第Ⅹ因子も正相関を示した($r=0.369$)。一方、TGの増加に伴ってPAI-1も増加し正相関を示した($r=0.223$)。〔結論〕 高TG血症は、低HDL血症、凝固系第Ⅶ、第Ⅹ因子および線溶系阻害因子のPAI-1の増加の合併があることがわかった。そして、高TG血症は血液凝固因子(第Ⅶ、Ⅹ因子)と線溶系(PAI-1)に変化をもたらし、凝固能の亢進を引き起こし、血栓線溶系を血栓形成傾向に促進させることが示唆された。

P-88 大動脈壁硬化度に及ぼすエストロゲンの影響に関する検討—大動脈脈波速度を指標として—

九州大
橋本和法、野崎雅裕、井上善仁、佐野正敏、
中野仁雄

〔目的〕 中高年婦人は卵巣機能の低下に伴い、動脈硬化性疾患が増加する。そこでエストロゲン(E)欠乏と動脈硬化との関連を明らかにするため脈波速度(PWV)の変化について検討した。〔方法〕 対象は未閉経婦人23名(I群)、両側卵巣摘出後婦人24名(II群)で、平均年齢(歳)は各々44.7、44.8、body mass index (kg/m²)は平均22.3、22.7である。全例で血中エストラジオール(E₂)、総コレステロール(TC)、ヘマトクリット(Ht)、心拍数、血圧、PWVを測定した。PWV測定はPWV-200(7kg電子)により行い、PWVに及ぼす血管内圧の影響を考慮して拡張期圧80mmHg補正を行った。またII群を無作為抽出法により二群に分け、12名(IIa)に結合型E 0.625 mg/日を1ヶ月間投与し、他の12名(IIb)に対しては薬剤投与は行わず、1ヶ月後のPWVを比較した。統計学的解析はt検定を用いた。〔成績〕 血中E₂(pg/ml)はI群で 83.5 ± 7.6 、II群で10以下、TC(mg/dl)はI群で 208 ± 8.6 、II群で 206 ± 7.3 、Ht(%)はI群で 35.2 ± 3.8 、II群で 34.9 ± 4.1 、心拍数は全例で徐脈或いは頻脈を認めなかった。PWV(m/sec)はI群で 7.19 ± 0.47 、II群で 7.67 ± 0.4 ($p < 0.01$ vs. I群)、結合型E 1ヶ月投与の影響については、IIa群で 7.09 ± 0.21 、IIb群で 7.72 ± 0.29 ($p < 0.01$ vs. IIa群)であった。〔結論〕 E欠乏によりPWVは増加し、E補充療法でその低下が認められた。E欠乏により大動脈の血管硬度は増加しその改善にはE補充療法が有用である。